

それでも生きる子供たちへ

2007(平成19)年5月21日 鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★★



第1話『タンザ』監督・脚本＝メディ・カレフ（アフリカ）／出演ピラ・アダマ／ハノウラ・カボレ／第2話『ブルー・ジブシー』監督＝エミール・クストリツァ（セルビア・モンテネグロ）／出演＝ウロス・ミロヴァノヴィッチ／第3話『アメリカのイエスの子ら』監督＝スパイク・リー（アメリカ）／出演＝ハンナ・ホドソン／ロージ・ベレス／アンドレ・ロヨ／第4話『ビルーとジョアン』監督・脚本＝カティア・ルンド（ブラジル）／出演＝フランシスコ・アナウエイク・デ・フレルタス／ベラ・フェルナンデス／第5話『ジョナサン』監督＝ジョーダン・スコット、リドリー・スコット（イギリス）／出演＝デヴィッド・シューリス／ケリー・マクドナルド／ジョーダン・クラーク／ジャック・トンプソン／ジョシュア・ライト／第6話『チロ』監督＝ステファノ・ヴィネルツォ（イタリア）／出演＝ダニエリ・ヴィコリト／エマヌエーレ・ヴィコリト／マリア・グラッツィア・クチノッタ／第7話『桑桑と小猫』監督＝ジョン・ウー（中国）／出演＝ザオ・ツークン／チー・ルーイー／ジャン・ウェンリー／ワン・ビン／ヨウ・ヨン（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2005年イタリア、フランス映画／130分）

……「世界中の子供たちの窮状を救うための映画づくり」のために世界から7人の監督が集結！貧困、盗み、ストリート・チルドレン、HIV感染などの重く苦しいテーマとして各地の子供たちの惨状が描かれるが、タイトルどおり「それでも生きる子供たちへ」というメッセージが脈々と……。私が残念なのは、ここに日本人監督が入っていないこと。もっともそれは、チャリティ活動に情熱を燃やさない日本人の必然的帰結……。そんな日本人でも、この映画を観て考え、行動すべきことはたくさんあるはずだが……。

■主人公は子供たち！

この映画はそのタイトルどおり、子供たちを主人公にした映画。しかし、7人の著名な監督がそれぞれの視点で描く子供たちの物語は、少年兵、貧困、ストリート・チルドレン、盗み、HIV感染など、重く苦しいテーマばかり。それは、この映画製作の発端が、「世界中の子供たちの窮状を救うための映画を作ろうと立ち上がった」ことにあるため。したがって、この映画づくりには国連のユニセフとWFP国連世界食糧計画という2つの機関も参加しており、映画の収益は全額ユニセフとWFP国連世界

食糧計画に寄付され、世界中の子供を救うため活用されるとのこと。

そう聞かされると、いかにも善意を売りモノにした教科書的な映画ではないかと一瞬疑ってしまうが、それは全くの見間違い……。

日本人のチャリティ意識は……？

この映画製作の言い出しっぺは、イタリアの有名な女優で WFP の飢餓撲滅大使であるマリア・グラツィア・クチノッタとのこと。欧米ではアンジェリーナ・ジョリーなどセレブたちのチャリティ活動が盛んだが、これは小さい時から社会奉仕の精神が育まれているため……？ これに対して、戦後教育の中で公共心を少しずつ失ってきた日本人は、チャリティ活動への意欲は薄く、せいぜい黒柳徹子がユニセフの親善大使として活躍しているのが目立っている程度。私は最近ワールド・ビジョン・ジャパンのチャイルド・スポンサーシップ活動に興味をもって取り組んでいるが、私の周りにたくさんいる大金持ちたちはそういう分野には全く関心がないよう……？

こんな企画に賛同した著名な7人の監督がこの映画づくりに参加したが、その中に日本人監督が含まれていないのは、ひょっとして日本人のチャリティへの関心の低さのせい……？

第1話『タンザ』

最近日本でもアフリカを題材とした映画がたくさん公開されているが、これもその1つで、ルワンダの12歳の少年兵タンザ（ビラ・アダマ）を主人公としたもの。4月7日に観た『ブラッド・ダイヤモンド』（06年）のプレスシートでは、「今も数十万人もの少年が強制的に兵士にさせられている」と紹介されていたが、この映画はそんな現実をテーマとして取り上げたもの。

少年兵たちはみんな強制的に兵士に仕立てられてゲリラ部隊に入っているわけで、多分自分が何のために、誰のために戦っているのかすらほとんどわからないまま、命令に従っているだけ……？ そんな戦いを続けているうち、仲間が1人また1人と死んでいったが、タンザは今なお奮闘中。そんなタンザの今回の任務は、真夜中に時限装置のついた爆弾を持って建物に侵入するというもの。そんな命令に従って行動するタンザだったが、今回のターゲットは何とタンザが憧れていた学校の教室。そんな過酷な現実の中、タンザがとった行動は……？

第2話『ブルー・ジプシー』

この映画のエミール・クストリッツァ監督の名前は私は全然知らなかったが、1954年にサラエボに生まれた彼は、ベネチア国際映画祭の金獅子賞やカンヌ国際映画祭のパルム・ドール賞の受賞等、ユーゴスラビア人の映画監督として国際的に高い評価を受けているらしい。彼の生まれたサラエボやセルビア・モンテネグロさらにボスニアと聞くと、その名前だけであのややこしい紛争地帯か、というイメージが浮かんでくる。この映画の主人公は15歳の少年マルヤン（ウロス・ミロヴァノヴィッチ）だが、その舞台は彼が今窃盗の罪で入っている少年院。今マルヤンは出所を目前に控えているらしいからうれしいはずだが、その顔を見ていると、どうもそうでもなさそう。それは一体なぜ……？

エミール・クストリッツァ監督は、少年～青年期を刑務所で過ごした人たちの再犯率の高さに興味をもち、その原因を考えていたところ、この『ブルー・ジプシー』というタイトルの映画を思いついたらしい。

マルヤンが出所した後、マルヤンに予想されるのは、窃盗団のボスである父親との共同生活。ボスは子供たちに盗みを命ずるだけで陰に隠れているから、見つかった場合に罪に問われるのはいつも子供だけ。そんなマルヤンだから、出所したら再び彼を待つ運命は……？ そんな予想の中、マルヤンは一体どんな行動を……？

第3話『アメリカのイエスの子ら』

日本ではエイズやHIV感染といってもまだ対岸の火事のようなイメージだが、アメリカではすぐ身近にある脅威。『マルコム X』（92年）や『インサイド・マン』（06年）で有名な黒人監督スパイク・リーは、アメリカ社会における黒人問題について常に大きな問題提起をしているが、今回のテーマはHIV感染。

人口が約3億人のアメリカ社会の中で、アジア系やヒスパニック系などマイノリティの人口が3分の1の1億人を越えたことが5月18日付の新聞で報道されたが、この映画の主人公ブランカ（ハンナ・ホドソン）は両親のそろった家庭の娘だから、比較的恵まれているはず……？ ところが、その両親はブランカに隠れてコソコソと注射の打ち合いを……。こりゃ一体ナニ……？

そのうえ、注射や薬好きの両親（？）は、ブランカにも「あの薬を飲め、この薬を

飲め」とうるさいため、それがブランカの不満のタネ……。ある日、ブランカはなぜか学校で「エイズ・ベイビー」と呼ばれ、級友たちからいじめを受ける羽目に……。さらに、傷ついた気持ちで家に帰ってきたブランカは、そこではっきりとあまりにも過酷な現実を知らされることに……。さあ、そこからブランカの再生はありうるのだろうか……。『アメリカのイエスの子ら』というタイトルの重みが、ズッシリと心に響いてくる問題提起作として注目したいものだ。

第4話『ビルーとジョアン』

ブラジルのスラム街に生きる子供たちを描いた『シティ・オブ・ゴッド』（02年）はすごくいい映画だったようだが、残念ながら私はこれを見逃している。その『シティ・オブ・ゴッド』の共同監督をつとめた女流監督のカティア・ルンドが、この短編を監督。タイトルとなっているビルー（フランシスコ・アナウエイク・デ・フレタス）とジョアン（ベラ・フェルナンデス）は、サンパウロのまちの貧民街に住む兄妹。子供たちの生活の糧は、鉄クズや段ボールなどを集めて換金することだが、これだけでやり方によっては意外に儲かるよう……？

運送会社がトラックに投資するように、品物（廃材物）を集めそれを換金するためにリアカーを借りることは、ビルーとジョアンにとっては1つの大きな投資。そしてその判断を下した以上、懸命にそれを活用することによって、利益が上がってくるもの。他方、経営は常に順調とはいかず、事故がつきもの。ある日、頼みのそのリアカーがパンクしてしまったが……？

私は都市計画をライフワークとして取り組んでいるが、大きなまちのつくりかえ、巨大ビル群の建設はある意味で社会の進歩。しかし、それは同時にこのビルーとジョアンが住み生活している貧民街をつぶしてしまうことになるのは当然。2008年にオリンピックが開催される北京がそうなら、ブラジルのサンパウロのまちだってそれは同じ。そんな中、ビルーとジョアンの2人は、しっかりとその商売（？）で今日も金を稼ぐことができるのだろうか……。それとも、そんな子供たちの努力は全く無意味となり、押しつぶされてしまうのだろうか……？

第5話『ジョナサン』

『ブラック・レイン』（89年）、『G.I. ジェーン』（97年）、『グラディエーター』（00

年)、『ハンニバル』(01年)等では有名なイギリスのリドリー・スコットは、1937年生まれの巨匠だが、その一人娘のジョーダン・スコットも映画監督をしているとは知らなかった。この短編は娘が脚本を書き、父親は師匠みたいな役割を果たしていたらしいが、いかにも女性らしいタッチの、大人が子供から学ぶというスタイルをとった物語。他の6作と異なり、最初に大人の主人公ジョナサンが登場する。彼は戦地の取材をしているフォトジャーナリスト。戦地取材のショックで幻覚にうなされ、人生と今の仕事に希望と誇りをもてずにいたジョナサンが、ある日森の中を散歩していると、そこに聞こえてきたのは子供たちの声。ジョナサンがその声を追っていくと、いつの間にか自分の姿が大人から少年に……。戦争は悲惨なものだし、戦闘が終わった後の戦場の焼け跡も悲惨なもの……。しかし、そんな戦場跡においても、そこで少年たちはたくましく生きていた。現実の厳しさを見てそこから逃避しようとする大人が多いのに対して、子供たちは……。そんな子供たちから何かを学んだジョナサンの姿は今……？

第6話『チロ』

イタリア人監督ステファノ・ヴィネルツォが、イタリアのナポリを舞台として展開させるのは、第2話『ブルー・ジプシー』と同じような、窃盗団の中で働く少年チロの物語。イタリアのローマやナポリのまちがどの程度物騒なのか私は知らないが、若い男の子が2人組で、白昼堂々と車の窓ガラスを割って、運転席の男の腕からロックスを奪い取るという手口を見ていると、その生々しさにビクッリ。

この映画が面白いのは、窃盗団のボスが経営しているという移動遊園地。日本ではちょっと考えられないし、どんなビジネスモデルで成り立っているのかもよくわからないからその実態は不明。それはともかく、堂々とボスと渡り合って交渉しているチロたちを見ていると、そのしたたかさに驚くものの、その反面やはり子供は子供。映画の後半、移動遊園地をめぐる微笑ましいシーンも登場するから、ひと安心を。

第7話『^{ソンソン}桑桑と小^{シャオマオ}猫』

7作の中で私が1番印象に残ったのがこれ。中国のジョン・ウー監督はハリウッドで大成功を収めているが、何と今回の短編が中国本土での初めての撮影となったらしい。この映画にはタイトルどおり、裕福な家庭のお嬢サマ^{ソンソン}桑桑(ザオ・ツークン)

と赤ちゃんの時に路上に遺棄され、今はゴミ集めをしているやさしいおじいさんの元で暮している少し足の悪い女の子小^{ジャオマオ}猫(チー・ルーイー)の2人が登場する。2人もホントにかわ



©2005 MK FILM PRODUCTIONS Srl RAI CINEMA Spa

いい顔立ちだが、そのコントラストの大きさがすばらしい……？

裕福ではあっても、映画の冒頭に見るように両親がケンカばかりしている家庭にある桑桑は全くしゃべらないし、笑顔も見せない。そのうえ、お気に入りの美しいフランス人形も母親の車の後部座席に座ってお出かけの際、ポイと捨ててしまう気ままぶり……？ 他方、小猫は、捨てられた直後に車に轢かれたため左手が壊れてしまったそのフランス人形を、おじいさんが拾ってきてくれたため大喜び。世の中、何が幸せで何が不幸せかわからないもの……？

ところがある日、市場でごみ拾いをしている最中、小猫のために鉛筆を拾おうとしたおじいさんは車に轢かれて死んでしまったから大変。再び天涯孤独となってしまった小猫は、子供を集めて花売りをさせている親方の元に引き取られ、生きていくために厳しいノルマを課せられることに……。他方、桑桑の方も順調ではなく、母親は自殺を考える毎日のように……。そして遂にある日、桑桑を後部座席に乗せたまま、母親は車をゆっくりと川の中へ突っ込みかけたから、さあ大変……。

車が川の中に転落する直前、母親が急ブレーキをかけたのは、今まで見たことがないような娘、桑桑の笑顔が目に入ったため。笑いを忘れていた桑桑が笑顔を取り戻したのは、少し前に小猫と出会ったことによるもの。果たして、大人たちの知らない間に、2人の少女はどこでどんな会話を、そしてどんな心の対話を果たしたのだろうか……？

2007(平成19)年5月22日記

第5章

これこそ本当のおススメ！